

『唐物語』の心象世界

——第十八話「楊貴妃」をめぐって——

森 下 要 治

はじめに

『唐物語』第十八話「楊貴妃」は、作品全体（二十七話）の叙述量の「四分の一弱」とも「五分の一強」とも言われる分量を占める。加えて、古来日本人にとってなじみ深い「長恨歌」「長恨歌伝」の翻案ということも手伝って、本作品の中でもとりわけ重要なものと考えられる。そうした認識からか、『唐物語』を対象とする研究では、多かれ少なかれ必ずこの第十八話に言及している。そしてその中でもふれられることの特に多いのが、その話末に付された結語の問題である。便宜段落分けして、次に引用する。

A これひとりきみのみにあらず。人むまれて木石ならねばみなをのづからなさけあり。いにしへよりいまにいたるまで、たかきもいやしきも、かしこきもはかなきも、このみちにいらぬひとはなし。いりとしりぬれば、まよはずといふ事なし。しかじ、たゞ

心をうごかす色にあはざらんには。

B おほよその世はみなゆめまぼろしのごとし。八苦のがるゝ事なければ、いとひてもいとふべし。天上のたのしみかぎりなけれども、いつつのおとろへさる事なければ、ねがふべきにもたらず、むまれてもよしなし。たゞ心を一にして三界をいとひ、九品をねがふべし。極楽をねがふとも、この世に執をとゞめば、ともづなをとかずしてふねをいださんがごとし。（この世をいとふとも）極楽をねがはずは、ながえをそむきて車をはしらしめんがごとし。この世をいとひ、極楽をねがはゞ、くるしみをあつめたるうみをわたりて、楽をきはめたるくにゝいたらん事はうたがふべからず。ゆめくゝいでがたき悪道にかへらずして行きやすき浄土にいたるべし。

※引用は講談社学術文庫『唐物語』（小林保治訳注）による。以下同じ。

若干の説明を加える。ABは本来一連の文章である。楊貴妃を思いつつ「みづからはかなく」なつた玄宗の最期を語つて、そうした愛執の問題が「きみ（玄宗）」だけのことではない、とA部分に言う。「心をうごかす色」とは、従つて直接には楊貴妃のごとき女性を指す。Aでは、「迷わぬためにも女性に出会わない方がよい」と結論されている。語りの視点は明らかに男性の立場からのものである。また「人むまれて」「しかじ、たゞ」云々の文言は、夙に指摘のあるように、白氏文集の新樂府「李夫人」による表現。原典以外からの表現の借用にも意味がありそうだが、本稿では立ち入らない。

翻つてBは、突然仏教の色濃い用語を駆使し、欣求浄土を勧める。そこには性別を越えた道理が語られており、内容の受け手は男女の別を問わない。池田利夫氏はAとBの間に表現意識の断絶を認め、更に『唐物語』においては仏教色がほとんど認められないこと、またBを欠く第十八話単独の伝本『長恨歌和文』の存在を指摘しつつ、Bが作者以外の後人による増補であると説く。^(注1)これについての検討から始めたい。

一

『唐物語』に仏教的な言辭がほとんど認められないとす

る池田氏は、しかしその検討途上で、次のような「仏教的言辭」もわずかながら認められるとする。

・かゝれどもわかきおひたるさだめなき世のうらめしさは、おもひのほかにこの夫はかなくなりけり(第八話)

・「かたちは六のみちにかはるとも、あひみんことはたゆる事あらじ」(第十八話)

・「我君の御ところに楊貴妃をおぼせる事のかぎりなきそこをしれり。六の道おぼつかなき所なし。ねがはくはむまれたまひつらむ所をたづねみて、かへりまいらん」(同右)

はじめの例は「老少不定」、あとの二例は「六道」を和らげた物言い。池田氏の本旨は『唐物語』の仏教色の希薄さを証明するところにあるので、右の例は指摘のみで、本格的な検討を加えられてはいない。だが例えば二番目の例は極めて重要なものである。七月七日驪山宮に御幸して、玄宗が楊貴妃に語つた言葉。二人の愛の永遠を言つて、六道を超克する愛執が示される。『唐物語』所収話に限らず、楊貴妃譚の骨格に直結する文言ととらえられよう。本話の典拠とされる漢籍には該当する表現が見えないので、翻案の際『唐物語』作者が選び取つた言葉と考へなくてはなら

ない。また三番目は方士「まぼろし」が玄宗に語る言葉である。楊貴妃の死後も断ち切れぬ玄宗の愛執が六道を超越するその仲立ちとして「まぼろし」が存在するのであり、その言葉は、当然ながら先の「かたちは六のみちに」云々を伏線として読んで、初めて意味を持つ。

『唐物語』全体を見渡すと確かに「仏教的言辭」は多くないが、第十八話に限れば右の他にもいくつか気になる表現を見つけられる。

楊貴妃の死後も明け暮れ彼女を思う玄宗の胸の内が次のように語られる。

・かくて日もゆふぐれになるほどに、御かたはらさびしきにつけても、「いかなる中有のたびのそらに、ひとりやゝみにまよふらむ」など、おぼしみだれたる心ぐるしき、「あはれにかなし」などいふもをろかなり。

楊貴妃を失った後の玄宗の心情描写はこの第十八話の読みどころの一つである。そこでの表現には注意を要しよう。なお「中有のたびのそら」との言葉続きは、覚一本『平家物語』巻九「河原合戦」末尾にも

まして中有の旅の空、おもひやられて哀也。

(龍谷大学図書館本を底本とする日本古典文学

大系による。ただし高野辰之氏旧蔵本は傍線部を「中有の空」とする)

と見えている。

また、いわゆる仏教語ではないが、処刑を迫られた楊貴妃の心の内を描く場面では、

・この世に楊貴妃、いかならんいはほのなかなりとも、おぼつかなからぬ御すまひならば、いと心ぐるしからずおぼしけるに、「おもひのほかにいのちもたえぬべきにや」と、あさからぬわかれの涙、ちしほのくれなるよりも色ふかくて…

との表現が見える。これも楊貴妃の物語では重要な読みどころのひとつである。『唐物語新釈』は「いはほのなか」を『古今和歌集』雑下の

いかならん巖の中に住まばかは世の憂きことの聞こえ
こざらむ (九五二)

(新日本古典文学大系による)

によるものと指摘する。妥当であろう。新日本古典文学大系はこの歌について「文選・遊仙詩七首の道士鬼谷子などを想像したもの」と注するが、中世の『古今集』注釈の世界では、『余材抄』のように『法句譬喻経』無常品を引く

ものがあり、また『頭注密勘』は

いはほの中は、天竺に四人の外道ありき。しなんこ
とおそれて、一人は海の中に入、一人は天にのぼ
り、一人は巖の中にかくれ、一人は市の中にまじはり
けれど、死の時にいたりにしかば、一人として死る道
をまぬかれず。無常の風にしたがふ心也。四人の中に、
巖にかくれたる一人を読み。

(日本歌学大系による)

として、院政期における理解の一端が知られる。この『頭
注密勘』の例は、『唐物語』の成立圏と歌林苑との関わり
においても重要である。^(注2) 背後に宗教的な広がりを負った
歌語と見てよからう。このほか「いはほのなか」との表現
は『新勅撰集』のほか『壬二集』『拾遺愚草員外』等にも
見^(注3)え、比較的になじみやすい言葉であつたものと想像され
る。

こうして一話のポイントにさりげなく挿入されたこれら
の言葉が、池田氏のごとく、単に「耳に易い」というだけ
のものとは考えにくい。特に氏が指摘された「六のみち」
の例は物語の主軸に関わるもので、「仏教的言辞」の多寡
による判断の危うさを覚える。このような用例が第十八話
を中心に散見することを重視したい。先の結語Bは『唐物
語』第十八話の骨子と位相を異にするものではない。むしろ

る物語中のこうした表現こそが大きな伏線となつて、前掲
Bを導いているものと考えたい。「唱導的」とも言われる
結語Bは、物語が語られる段階ですでに準備されていたの
である。

なお小峯和明氏は、この部分について一見矛盾すると見
えるABを、『宝物集』や願文を例に取りつつ「反転・逆
説の表現構造」としてとらえ、後人による補入という考え
方を退^(注4)けている。

二一

本作品の作者は藤原成範とされる。信西の子息であり、
平治の乱後、一旦は配流の憂き目に遭つた。また歌人とし
てもそれなりに活動し、作品の内部に彼を作者と見て抵触
する反証を見出しがたいので、本稿もその立場から論述を
進めることとする。

小峯氏は、『唐物語』の表現生成の基底として和歌・歌
学の存在を指摘、それが特に歌林苑に近いことを証明し、
加えて作品と作者との相関について第一・二話を中心に論
述^(注5)された。そして白楽天「琵琶引」を原拠とする第二話で、
「主人公として対象化されている」白楽天に源頭基や光源
氏の配流のイメージが重層され、そこに更に「表現主体の
成範をも重ねてみる」ことができる」とされた。また「琵琶

「琵琶引」の物語は（中略）成範が最も自己と重ねて語りきつた章段といえよう」とも述べられている。

『今昔物語集』震旦部や唐鏡のように中国の歴史記述を意図するようなもの、あるいは院政期以降の古典籍注釈に顕著な本説の追求などを除いて、一般に中国説話は、日本における（虚構と事実性との別を問わず）様々な出来事の類例として、あるいは比喩として翻訳・翻案されることが多いだろう。それだけに歴史記述と別のところで中国説話そのものを物語化し、題材として対象化した『唐物語』の独自性は際だが、これを単に独自性のうちに埋没させるのではなく、そうした独自性を支えるものの追究が肝要となるはずである。このような認識に立つとき、小峯氏の検討の方向性は概ね首肯しうるものと思われる。だが、本稿冒頭にも述べた叙述量の問題が気に掛かる。「自己と重ねて語りきつた」とするには、第二話は他の多くの章段同様あまりに短い。叙述量だけが問題でないことは勿論だが、『唐物語』に小峯氏の言われるような特質があるとして、名高い哀話を嬋々と語りつくした第十八話への見通しが示されるべきであった。

三

ここで第十八話の楊貴妃の物語の骨格を確認しておく。

改めて述べるまでもなく、この話は皇帝玄宗とその寵妃楊貴妃との愛を基本の構図としている。その愛ゆえに玄宗は国政を誤り、寵妃を奪われ、断ちがたい愛執に悩み苦しむ。玄宗の苦しみを癒すべく方士（『唐物語』では「まぼろし」）が登場し貴妃の亡魂を蓬萊に尋ねるが、方士の報告に玄宗の思いは募るばかり。漢の武帝と李夫人の物語と並べられることが多いが（『類聚句題抄』『和漢朗詠集』の源順「対雨恋月」など）、帝王と寵妃、別れと後に残された者の苦しみといった辺りに共通のモチーフが見出されたためであろう。

和歌には『長恨歌』の句を題にして詠まれたものが残っており、日本における『長恨歌』（あるいは楊貴妃の物語）の受容の様態を知る手がかりとなる。いくつかを例示しよう。

例えば、『大弑高遠集』には『長恨歌』から二十六の句を引き、それぞれを題にして詠歌している。まず「或人」から「長恨歌、楽府」の歌が二十首寄せられ（うち十首が長恨歌に関わるもの）、高遠が「同長恨歌に、あはれなる事ありしをかきいてて歌十六首をよみくはへ」という歌群である。「或人」は『長恨歌』の各場面を比較的に満遍なく詠んでいるが、それに「よみくはへ」られた高遠の歌は、次のようであった

(或人の、長恨歌楽府のなかに、あはれなること
をえらびいだして、これがころばへを甘
首よみておこせたりしに)

(和歌二〇首略)

同長恨歌に、あはれなる事ありしをかきいで
て、歌十六首をよみくはへてやる

三千寵愛在一身

我ひとりとおもふころもよの中のはかなき身こそう
たがはれけれ(二七五)

尽日君王看不足

見ても猶あかぬころのころをばころのいかに思
ふころぞ(二七六)

花鈿委地無人収

はかなくてあらしのかぜにちる花をあさぢが原のつゆ
やおくらん(二七七)

君王掩眼救不得(〇)

いかにせんいのちのかなふ身なりせばわれもいきては
かへらざらまし(二七八)

聖主朝々暮々情(〇)

あさ夕にしのおころのしるしにはあまがけりてもき
みがしらなむ(二七九)

君王相顧尽露衣(〇)

せきもあへぬなみだのかはにおぼほれてひるまだにな

き衣をぞきる(二八〇)

帰来池苑皆依旧(〇)

からころもなみだにぬれてきてみればありしながらの
あきはかはらず(二八一)

春風桜李花開日(〇)

はるかぜにゑみをひらくる花の色はむかしの人のおも
かげぞする(二八二)

秋露梧桐葉落時(〇)

木のはちるときにつけてぞなかなかにわがみのあきは
まづしられける(二八三)

西宮南内多秋草(〇)

九重のたまのうてなもあれにけりころとしける草の
上の露(二八四)

宮葉滿階紅不掃(〇)

おちつもる木のは木のははおのづからあらしのかぜに
まかせてぞみる(二八五)

夕殿螢飛思悄然(〇)

おもひあまりこひしき君がたましひとかけるほたるを
よそへてぞみる(二八六)

旧枕故衾誰与共(〇)

うちわたしひとりふすよのよひよひはまくらさびしき
ねをのみぞなく(二八七)

蓬萊宮上日月長

ここにもありしむかしにあらませばすぐる月日もみ
じかからまし(二八八)

在天願作比翼鳥

おぼろけのちぎりのふかきひととぢやはねをならぶる
身とはなるらむ(二八九)

在地願為連理枝

さしかはしひとつ枝にとちぎりしはおなじみやまのね
にやあるらむ(二九〇)

以上十六首のうち句題下に○印を付したものは、楊貴妃
を失った玄宗の心情を描写するための表現である。

また『道済集』にも『長恨歌』句を題にする歌群十首が
あるが、うち四首がやはり後に残された玄宗の胸の内を詠
んだものである。この歌群から一首、『金葉集』秋に入集
する。「長恨歌のこころをよめる」の詞書をもつ次の歌で
あつた。

おもひかねわかれし野辺をきてみればあさぢが原に秋
風ぞふく
(原題は「不見玉顔」、一六五)

要するに、楊貴妃のいない玄宗の寂しさが興味の対象と
なったもので、他に『拾玉集』『拾遺愚草』にも『長恨歌』
句題の歌が見えるが、詠作の視点は玄宗の方に一層傾く。
しかしここに願文等の漢詩文を加えると状況は変わって

くる。

『本朝文集』藤原永範作「鳥羽天皇奉為贈皇后修法華八
講御願文」には「早承先朝之恩。漢李唐楊之寵光。更非同
日之論」と見え、帝の寵愛を承けた女性として楊貴妃に焦
点が当てられている(この点、『本朝統文粹』大江匡房「円
徳院供養願文」も同趣)。また『言泉集』は「亡妻(夫婦儀)
に

夫婦者十倫之始也。伉儷一生支也。其愛尤深其儀甚重。
彼周穆王傷盛姬重壁台下為三日哭。唐玄宗哭楊后秦陵
山中落一掬淚。

(貴重古典籍叢刊『安居院唱導集上』による)
とし、夫婦の愛を焦点化する。また『澄憲作文集』にも、
「五十二 愛別離苦」には

夫愛別離苦者 離ニ恩愛、父母ヲ 別、丁寧、妻子、方
名、愛別離苦、所以、樹欲、静、風不停、子欲養
親不待也 実、凡夫、境界、口惜、事、貴賤、事与
心相叶、万、如、思、事、無、支度、外離、恩所知
識、違、思、別善友親族、一事、侍也、就、此、有生
之別、有死之別、王昭君之隔、雁山之雲、是、生
別、楊貴妃、殘、馬嵬、哀、是、死、別也、上陽人、幼
離、ニ父母、手、是、生、別、李將軍之思、放、ニ孝
養、矢、是、死、別也矣

(大曾根章介「澄憲作文集」(秋山虔編『中世文学の研究』所収)による。一部表記を改めた。)とあつて、玄宗と楊貴妃の別れを「愛別離苦」の例ととらえる文言も見えている。

後に残された玄宗に寄り添う発話となつてゐる点では先の和歌の視点に近似するが、その視点が見据える先にあるものには微妙なずれが看取されよう。更に極端なものでは、単に女性の美貌を讃えるためだけに楊貴妃を引き合いに出すものもある(『新猿楽記』など)。こうした漢詩文での用例をひとしなみに説くことは容易でないが、和歌に詠み込まれる場合と異なり、玄宗の心情のみならず、楊貴妃の、帝の寵愛を承けた女性という属性にも目が向けられることは間違いない。また漢詩文ではないが、『長恨歌』との関連において著名な『源氏物語』桐壺の劈頭には、更衣への桐壺院の寵愛の深さを「楊貴妃のためしも引出つべくなり行」と喩える例が見える(もつともこれは、この寵愛ぶりが世の乱れに繋がることを案じつつ『長恨歌』が想起されるので、必ずしも帝の寵愛そのものを玄宗と楊貴妃に見立てたものとは言えないかも知れない)。

四

『唐物語』第十八話には、気になる部分がいくつかある。

楊貴妃の物語のうちで、わが国において最も人口に膾炙したであろう『長恨歌』は、近藤春雄氏も述べられるとおり、玄宗の心の物語であつた。語りの視点は飽くまで玄宗に寄り添い、楊貴妃は玄宗に見つめられ、愛され、追慕される存在としてあつた。先の和歌における例は、これに沿つた理解の反映であろう。しかし『唐物語』においては、そうした玄宗への注目は当然のこと、楊貴妃への注視も忘れられていない。たとえば楊貴妃が玄宗の怒りに触れ、宮を退出したおり、玄宗に奏上された彼女の思い。また蓬萊に転生し「まぼろし」の訪問にあつて、玄宗との思い出を語る場面。いずれも『唐物語』においては印象的に描かれている。これらの部分は長恨歌だけでなく、『長恨歌伝』や『楊太真外伝』に拠つたものと指摘されている。『長恨歌』に足りない部分を他の文献で補つたとも考えられるが、そう単純には割り切れない。たとえば玄宗が楊貴妃を求め出だすくだりで、『唐物語』は単に

これよりさきに、元獻皇后、武淑妃などきこえたまひしきさき、世にならびなく御ころざしふかくおはしましき。それはかなくならせ給てのちは、あまたのなかに御心にかなひたる人おはせざりき。これにより、高力士におほせられて、みやこのほかまでたずねもとめさせ給に、楊家の娘をえ給てけり。

と述べるのみである。一話の主要人物楊貴妃の性格づけに繋がる重要な叙述である。この辺りは、次の『長恨歌伝』に拠っているらしい。

詔高力士潜搜外宮、得弘農楊玄琰女于壽邸。
既筭矣。

しかし、傍線を付した引用の後半部分については、『唐物語』に述べるところがない。「壽邸」とは玄宗の太子「壽王」の邸宅を指し、楊貴妃がすでに壽王の妃となっていたことを表している。だが『唐物語』において、彼女は飽くまで「楊家のむすめ」である。中国文献に典拠を求め、典拠に記された記事を取捨しているのである。表現を『長恨歌伝』に拠り、叙述内容は『長恨歌』に従う、そうして物語から醜悪な要素を排除する。そうした配慮も想定されるが、いずれにしても『長恨歌伝』によって周知のはずの、玄宗が壽王から楊貴妃を奪った記事が採用されなかった理由が求められなければならないまい。

また、他にも明らかに不自然な箇所が見受けられる。

『唐物語』の翻案の様態は時に歌物語的と言われ、ほとんど一話に一首ないし二首の和歌を含む。そして基本的には、作中の登場人物に和歌を詠ませている。第十八話は、物語そのものが長いだけに和歌も多く、八首の和歌が散文の合間に記しつけられる。

そのうち、例えば玄宗の詠と思われるもの、次の和歌がある。

・ すがたこそはかなき世々にかはるともちぎりはく
ちぬものところそきけ

などの給つゝ、御てをとりかはして涙をながし給けるを、すゑの世にきく人さへ袖のうへ露けし。

・ 物のあはれをしらぬ草木までも色かはり、なさけなきとりけだものさへ涙をながせり。

ものごとにかはらぬいろぞなかりけるみどりのそらもよものこそゑも

御ともに侍ける人、心あるも心なきも、たけきもたけからぬも、涙にをぼれてゆきかたもしらず。帝の御心うちには、

なにせんにたまのうてなをみがきけん野辺こそつゆのやどりなりけれ

・ もろともにかさねし袖も朽果ていづれの野べの露むすぶらん

かやうにおもひつゝなみだををさへてかへらせ給ふ御ありさまのよはくしきも、いはゞをろかに成ぬべし。

別にし道のほとりにたずねきてかへさはこまにまかせてぞゆく

それぞれ「などの給つゝ」「御心のうちには」「かやうに」の言葉によって散文と和歌とを連結し、詠主を明確にする。

また楊貴妃の亡魂を尋ねた「まぼろし」の詠は、次のように確認される。

・：やうく夜もなかばすぐる程に、花のとぼそに白露
ひまなくをけるをみるにも、

あけやらぬはなのとぼそのつゆけきにあやなく袖
のそぼちぬるかな

ここも先の玄宗の詠歌と同様である。ところが、次の例は如何であろうか。

・：馬嵬のみちのほとりに、いまはかぎりとみえ給しゆ
ふべのうらみも、なを只今のやうにおぼせる気色、ま
ことに梨花一枝はるあめをおびたり。

ひかりさすたまのかほばせしほたれてなをそのか
みの心地こそすれ

方士かへりまいりてこのよしを奏せしむるに、御心日
をへてなやみまさり給て、むまれ給はん程をも心もと
なくやおぼしけん、そのとしの夏四月にみづからはか
なくならせ給にけり。

しらざりしたまのうてなをしりえてぞよはのけぶ
りときみもなりにし

蓬萊にあつて、玄宗との思い出に涙する楊貴妃を詠んだ歌である。先の例のように和歌と散文とを連結させる文言が見当たらない。またこの状況で歌を詠みうるのは「まぼろし」だけだが、歌の内容から言つて、「まぼろし」の

詠とするのは難しい。「そのかみ」とは馬嵬坡で命を落とす直前の、涙に暮れる楊貴妃の映像を重ねての表現と見られるが、「まぼろし」はその馬嵬坡の目撃者の中にはいなかった。「まぼろし」には馬嵬坡の楊貴妃と蓬萊の彼女とを重層させることができないのである。この部分だけに限らないが、作中人物に詠歌させる趣向は、時に破綻を来している。あるいは和歌と散文の連結を示す言葉を欠落させること自体、和歌の詠み手が「まぼろし」でないことを示すサインであるとも考えうる。

「まぼろし」以外にこの歌を詠みうる人物、それは物語すべての目撃者たる語り手を置いて他になかろう。『唐物語』の語り手は、作中人物の如く和歌を詠み、そうすることとで物語世界に姿を現したものと考えられる。

五

物語世界の楊貴妃のすべてを見、哀惜の情を込めて物語りうる語り手。これに類似した関係を（虚構に対しての）現実世界に見いだすことが出来る。『唐物語』作者である成範とその娘小督の関係である。高倉天皇に愛され、範子内親王を産み、のち何らかの事情で出家隠棲した小督については『平家物語』の逸話で知られている。ただしここで問題となるのは、『平家物語』が伝える彼女の姿でなく、

父成範が見たであろう彼女の姿である。

『平家物語』では、嵯峨野に隠棲した彼女を、高倉天皇の命をうけた弾正弼仲国が尋ねることになっている。この部分に注目して、『長恨歌』を承けた『源氏物語』桐壺の影響を見る説もあるが、事実関係をとり立てるときには問題にならない。^(注6)しかし彼女が天皇に愛されたこと、その愛を断ち切って仏門に帰依したらしいことなど注意されてよい。

すでに諸氏のふれられることだが、『山槐記』治承四年四月十二日の記事によつて、小督がその前年、範子内親王を産んで後出家し、宮を退下したものと知られる。清水浜臣は『月詣集』巻十

高倉院女房さまかへてのち、いくほともなくて
院もかくれさせ給ひければ、いひつかはしける

大納言実国

てる月を見すてゝいてしことわりは雲かくれぬる今こ
そはしれ(九九三)

を指摘し、この「女房」に小督を宛てる。^(注7)状況から考えて妥当なものと言えよう。前記『山槐記』の記事は、彼女の出家の原因について述べていないが、右の実国詠はその手がかりを与えてくれる。

出家の「ことわり」を、「今」、「院もかくれさせ給」うたこの時になって初めて知ったという。「ことわり」とは、

決して気ままな理由を意味しない。出家の機会を失い宮中に残っていたとすれば、堀河院の死に接した讃岐典侍の深い悲しみを、小督も味わつたに違いない。結果的に「出家してよかつた」とでも言いたげなこの歌の「ことわり」とは、いわば愛別離苦からの解放ということではなかつたか。その一方で澄憲は、先に例示したように楊貴妃の物語から「愛別離苦」の命題を掘り起こしていた(『澄憲作文集』)。裏返せば、この「ことわり」こそが、楊貴妃と小督の運命の違いを決定的にするものであつたのだ。小督の真意は知れないが、周囲の理解にそうした一面が窺えることは興味深い。実国の歌が『月詣集』に入集すること自体、彼の認識が『月詣集』成立圏で受け入れられたことを示している。『月詣集』の成立基盤のひとつには『唐物語』との関係が注目される歌林苑があり、これも見逃せない事実である。

右のごとく、二人の女性の人生は、帝に愛された女性という点においては共通するが、その後辿つた運命は著しく異なる。楊貴妃は死してなお愛執を断ち切ることが出来ず、一方小督は愛別離苦を逃れ嵯峨野に隠れる。『唐物語』作者成範は二人の女性の生き様をこのように理解していたはずである。確かに二人の物語はいちいちに符合せず、ために『唐物語』第十八話にモデルとしての小督を想定することはできない。しかし第十八話末尾に、玄宗と楊貴妃の

愛執を「この道」と言い、「八苦」を逃れるべきことが説かれるとき、実国が小督の生から読みとった「ことわり」とこの結語とがともに「愛別離苦」を取り立てることと軌を一にするのは、なお疑いないのである。二人の運命は、出発点を共有しながら、この「ことわり」を軸として、あまりに対照的である。だがそれゆえにこそ楊貴妃と好一對の存在として、小督のイメージが彼女を知る人々には比較的容易に喚起されたものとも考えられよう。

帝に愛された女性、夫婦の恩愛。それが願文の世界で楊貴妃の物語が立ち上がる重要なポイントであった。そして愛別離苦というテーマのもとで、願文の世界の楊貴妃と小督の出家とが交錯し、楊貴妃の物語の基底に娘小督のイメージが揺曳する。作者の表現行為のうちにそうした体験が胚胎することは、十分にあり得ることではないか。

小督と楊貴妃とを重層させる見方は、何も私一人のものではない。『平家物語』の影響下に成立したと思しい謡曲「小督」においては、高倉天皇と小督の愛を「たとへ」て次のように謡う。

彼漢王の其むかし、甘泉殿のよるのおもひ、たえぬ心
や胸の火の、けふりにのこる面影も、見しは程なき哀
の色、中中なりし、契りかな。唐帝のいにしへも、驪
山宮のささめごと、もれし始めをたづぬるに、あだな

る露の浅茅生や、袖に、朽ちにし秋の霜、わすれぬ夢
をとふあらしの、かぜのつて迄、身にしめる心なりけ
り

(朝日古典全書による。表記は私に改めた。) すなわち帝の愛を取り立てて李夫人・楊貴妃にたとえて
いるわけで、時代の下る資料ながら、天皇の寵愛を受けた
小督に楊貴妃を重層させることを可能にする傍証たりえよ
う。『平家物語』の表現が謡曲「小督」の認識を可能にし
たものかも知れないが、その『平家物語』の叙述にしても、
歴史的個としての小督から完全に離れることは出来なかつ
たはずである。小督と楊貴妃のイメージを重ね合わせる見
る土壌は、かなり早い時期から、すでに準備されていたと
見てよい。

こうして、楊貴妃を見つめる語り手の視線は、作者が
小督を見つめる視線に隣り合うところにあつたのではない
かと想像される。馬嵬坡と蓬萊での楊貴妃を語った語り手
と、小督の運命の変転を遠からぬ場所で見守つた作者成範
とは、思いのほかに近い関係にあつたかもしれない。

六

『平家物語』(寛一本)巻六「小督」は、この段の女主人
公を次のように紹介する。

此女房は、桜町の中納言重教（成範）の卿の御むすめ、宮中一の美人、琴の上手にてをはしける。冷泉大納言隆房卿いまだ少将なりし時、みそめたりし女房也。

『平家物語』は、この後彼女が隆房になびいたこと、しかし小督が高倉天皇に召されて二人の愛が途絶えたことなどを語る。この辺りには、『隆房艶詞』との関連が説かれている。この密やかな恋愛について小督は黙して語らないが、『隆房集』『艶詞』について、久保田淳氏は次のように述べられている。^(注8)

作者のさがとして、かれ（隆房）はこの極めて私的な、秘め置くべき内容の書き物を筐底深く秘めておくことに堪えられなくなったのだと想像する。（中略）そして筆者はそうして発表されたこの作品の最初の読者として、『平家公達草紙』のそこに語られている、平家の公達を含む当時の若公達、それから消息通の女房などを想像するのである。

久保田氏のこの指摘は、恐らく正しかろう。隆房は歌林苑とも交流があったから、成範の耳にも隆房の著述の噂は届いていたはずである。また上横手雅敬氏は、彼の処世術についてやや揶揄的な口調で

恋に破れた小督が、嵯峨野で仏道を行ないすましているころ、かつて「生きてものを思はんより、死なん。」（巻六、「小督」）とのみ願った隆房は、不実にも、高階泰

経の女婿として、従三位をせしめていたのである。

と述べられている。^(注9)隆房の真意は知れないが小督の沈淪とは対照的な彼の姿が見られたことは事実のようである。楊貴妃と小督とが重ねられるとき、玄宗には高倉天皇の面影が重ねられたに違いない。とすれば隆房から想起される人物は、初め楊貴妃を妃としていた壽王でしかありえない。^(注10)逆に壽王について語ることは、隆房が暴露した娘の過去を再び曝すことにもなるのである。小督の父である『唐物語』作者が楊貴妃の物語を語るに際して壽王とのいきさつを記さなかつた理由は、そんな所にも求められるのではないか。

『唐物語』第十八話は、小督の前半生の隠喩であつた。

おわりに

楊貴妃の物語を語りつつ、小督の生が幻視される。身近な人物の実人生が周知の物語の登場人物を惹起する願文などのあり方とは逆転した構造が、ここに看取される。そうした第十八話の仕組みを考えると、例の唱導的な結語の文言は小督と、彼女を知るごく一部の人々に強烈な印象を与えたに違いないと思われる。作者が想定した『唐物語』第十八話の読者、それは作者周辺の歌林苑をめぐる人々、そして小督その人ではなかつたか。『唐物語』全体のなかで屹立するこの話末の評言は、「説話的性格」などといつ

た一般化によつては説明できない。実国がただ「ことわり」とだけ述べたものの内実こそ、第十八話末尾の唱導的結語であつた。作者周辺のごく限られた範囲で共有されていたはずの「ことわり」を基盤として本話末は記されたと思ふなければならぬ。

従つて、いまだ決着を見ない『唐物語』の成立時期の問題も、この第十八話に限つて言えば、小督が宮中から退き高倉院が没した時期（養和元年）を一つの目安と考へておかねばならぬ。

また『唐物語』の「説話的性格」を言うのであれば、作者の見た現実の隠喩としての側面をも取り立てるべきであろう。説話は多かれ少なかれ、「喩え」としての機能を有する。小峯氏は本作品のなかに、人間の情愛だけでなく、それに絡め捕られながら幾つかの政争が描かれることを指摘されるが、このことも作者が見た現実と無縁でないはずである。本作品をただ中国説話の翻案と見るだけでなく、その翻案が意味するものに目を凝らさねばならぬ。

注

1、『日中比較文学の基礎研究—翻訳説話とその典拠—』（補訂版、笠間書院 昭和六十三年九月）第一章「唐物語序説」。

2、「唐物語の表現形成」（和漢比較文学叢書四『中古文学

と漢文学II』、汲古書院 昭和六十二年二月）「唐物語小考」（中世文学研究十二号、昭和六十一年八月）。

3、例えば次のような用例を確認できる。

『新勅撰和歌集』卷十四恋歌四

（こひのうたあまたよみ侍りけるに）

前大納言忠良

世のうさやきこえこざらむおもかげはいはほのなかに
おくれしもせじ（九二四）

『齋宮女御集』

みねの君うせてのころ

世のほかのいはほのなかもはかなくてみねのけぶり
いかでなりけむ（七二）

ひろはたのみやの、あるまじきよをすみたまひ
てのち、ひさしうきこえかはしたまはで、この
宮わたりの人まゐりけるにつけて

よのほかのいはほのなかにすまふともわするるほども
あらじとぞおもふ（一六八）

『和泉式部続集』

かたらふ人の、よにてよならぬ所をなんみてわ
びたる、といひたるに

もとむれどいはほのなかのかたければ我もこのよにな
ほこそはふれ（二二四）

『周防内侍集』

なにとなく心のうちもはれまなくのみおもひみ
だれて

もとむれどありがたきかなうき身にはいはほの中も山
のあなたも(四四)

『林下集』

おなじころ清輔朝臣のもとへ申したりし

かぎりなきわかれとおもへどこれやさはうき世をいと
ふつまとなるべき(二六七)

返事

なにかおもふうき世をよそにみることはいはほのなか
もかたしとぞきく(二六八)

『壬二集』卷下恋部

(恋歌あまたよみ侍りしとき)

しのび侘びいはほの中を尋ねてもそれも思ひのある世
なりけり(二七六八)

『拾遺愚草員外』

(雑廿首)

こけも又いたづらにてぞおいにける岩ほの中もたのみ
なのよや(七五四)

4、注2「唐物語小考」。なおこの点に関しては、その後「江
都督納言願文集の世界(三)」(中世文学研究十五号、平
成元年八月)にも再説される。

5、同前。

6、上横手雅敬氏『平家物語の虚構と真実』(塙新書、昭
和六十年十一月)。小督が高倉天皇の寵愛を一身に集め
たことや清盛の怒りに触れて出家させられたことと併
せ、仲国の訪問も平家物語の虚構であるとする。

7、文化五年刊『月詣和歌集』。直接には、富倉徳次郎氏『平
家物語全注釈』中巻により知り得た。

8、『今物語・隆房集・東斎随筆』(中世の文学、三弥井書
店 昭和五十四年五月) 解説。

9、注6書。

10、鎌倉末期の隆房卿艶詞絵巻には昼御座で対座する男性
二人と、奥の格子戸のうちに座す女性を描いた場面があ
る。小松茂美氏はこの構図について、小督をめぐる高倉
天皇と隆房の「恋の鞘当て」と見、この絵巻のクライマッ
クスであるときされる(『日本の絵巻』)。かなり早い時期
から、この三角関係は注目を集めていたことが知られる。

11、同注4。

(もりした ようじ 本学助教授)